Myanmar-Japan Collaboration Project for Fostering Medical Human Resources

ミンガラバー こんにちは

NPO法人
日本・ミャンマー
医療人育成支援協会
〒700-0023
岡山県岡山市北区駅前町2丁目4番23号
TEL:086-224-0102
URL:http://www.mjcp.or.jp

ヤンゴン郊外に診療所

協会呼びかけで6ヵ所目

倉敷の井上さん贈る

ミャンマー最大都市のヤンゴン郊外に、協会員の寄付によって、また1つ、新しい診療所が開設された。贈り主は倉敷市玉島の元会社経営、井上浩さん(78)で、その名は「井上クリニック」。協会の働きかけでミャンマーに贈られた診療所としては6ヵ所目だ。

「井上クリニック」の前で、贈呈式に出席した協会員ら。中央のネクタイ姿が井上さん＝イエ・モン村

ヤンゴンから北北東へ約50キロ、人口6千人のイエ・モン村。ここには診療所があったが、2008年の大型サイクロン襲来で屋根が吹っ飛ぶなど大破した。

その全面建て替えに、井上さんが資金提供を思い立ったのは、数年前、ある会合で知り合った岡田茂理事長に誘われてミャンマーを訪れたのがきっかけ。まるで日本の終戦直後を思わせる貧しさの中で、懸命に誠実に生きる信仰心の厚い国民性に触れた。「あの人たちのために、少しでも役立つなら」と支援を決めたという。

新しい「井上クリニック」は堅牢な鉄骨造りの総レンガの平屋建て。少々のサイクロンにも耐えられるよう設計されている。診療室や産室を備えており、助産師が常駐する。この村では年間約80人が出産する。重症疾患の場合は約5キロ離れた地区中央病院に紹介する。

3月12日の贈呈式には、日本から協会員ら10数人が出席した。この地区の医療責任者や学校の先生による謝礼の言葉をうけて、井上さんが「健康は富より尊し、といいます。皆さんの健康と幸せをお祈りします」と英語であいさつ。協会員より託されたボールペンを岡田理事長が地元の子供たち使ってもらいたいと村長に贈った。村には3つの小学校と1つの中学校があり、389人が通っているという。

地域医療の中心 運営は保健省

既設の5ヵ所

今回の「井上クリニック」で、協会の呼びかけなどによる寄付でミャンマーに設置された診療所は6ヵ所になる。

5か所はヤンゴン近郊に、残り1か所はヤンゴン東方約200キロの農村部ある。これまで診療所がなかったり、あっても2008年の巨大サイクロン禍で流失したり壊れたりしたところに設置。いずれもミャンマー保健省によって運営され、地域医療の中心になっている。

これまでの5か所は次の通り（開設順）。

①**下野クリニック**（2008年完成、翌9年看護宿舎、11年産院併設）。協会理事下野國男さん寄付。

②**NPOクリニック**（9年完成）。サイクロン被害で協会が募った基金で建設。

③**茜クリニック**（9年完成）。協会理事西山央子さん寄付。

④**アー・リン・ヤン＝希望＝クリニック**（10年完成）。協会員南川志津子さん寄付。

⑤**ときわ・岡コンクリニック**（11年完成）。岡山コンクリート設立50周年事業。

岡田理事長に岡山県文化賞

ミャンマーの医療活動を評価

協会の岡田茂理事長が岡山県文化賞を受け、2月23日、その授賞式があった。病気を引き起こす酸化ストレスの原因として鉄の役割を明らかにした研究者としての実績に加え、長年にわたるミャンマーへの医療支援活動が認められての受賞だ。

鉄の研究と2本柱で

岡田理事長にとって、「鉄」についての研究はライフワーク。アメリカ留学、京都大学講師、岡山大学教授の40年近くにわたって、一貫して研究を続けてきた。その結果、人体にとって欠かせない鉄も、過剰に存在すると危険性の高いことがわかり、実験によってがんの発生を認めた。

一方、ミャンマーとの関わりも30年近くになる。岡山大学とミャンマー保健省の間で、研究者交換などの協定を結び、岡山大学退職後の2006年に、NPO法人「日本・ミャンマー医療人育成支援協会」を発足させ、理事長として多彩な支援活動を行っている。

石井岡山県知事（右）から表彰される岡田理事長＝岡山市内のホテル

文化賞授賞式では、石井正弘知事が表彰状と副賞を贈り「本県の学術文化の振興に多大な功績」と岡田理事長の業績を称えた。

「皆さんのご支援あってこそ」

受賞について、岡田理事長はこう話している。

◇

この度の岡山県文化賞の受賞に際しては皆様から多くのお褒めの言葉を頂き、大変感謝しております。

鉄の研究は「鉄バイオサイエンス学会」設立と代表世話人として誘致した国際学会を2003年に京都で開催したことで、私の主たる役割を終え、研究の流れは現在、名古屋大学の豊國伸哉教授のもとで花開きつつあることは嬉しい限りです。

ミャンマーとの共同研究は医療人育成事業へと発展し、さらにミャンマーの民主化を契機として、大きな動きになろうとしています。これも協会員の皆さまのご支援があったからこそと感謝しております。東南アジアで最も親日的だったこの国の人たちの心に報いる事業を続けるため、今後とも益々のご支援をお願いいたします。

2人のミャンマー訪問記

ヒ素の除去装置を設置

浄水器メーカー
東洋技研
東谷 健一郎

ミャンマーをはじめ東南アジアの国々には少なからずヒ素汚染があり、それは工場排水ではなく、自然由来のヒ素が原因です。それも1950年～80年代に日本などの先進国によって掘られた浅井戸が原因で発生。浅井戸により、飲料水が原因で亡くなる人は減少したかのようにみえましたが、その半面、地中にあったヒ素を地表に上げてしまったのです。ミャンマー政府の報告では、人口約6千万人の1％強の約75万人がヒ素汚染の水を飲用しているそうです。

浅井戸のヒ素濃度は地域によって異なり、約100～300ppbと急性中毒になるレベルではありませんが、毎日飲んだり、調理に使用したりすることにより、皮膚疾患や内臓癌などが発生が心配されます。

昨年秋に訪れ、汚染の調査をするとともに、試作したヒ素除去装置を設置しました。経済的な発展が予想される中で、事業として期待できるかを判断するのも大きな課題でした。DMR(ミャンマー国立医学研究所)でヒ素汚染について研究しているスタッフと情報交換をしましたが、外国の援助だけに頼るのではなく、自分たちでもできることは自分たちで対応していこうという積極的な印象を感じました。

除去装置を設置するザローンへは、DMRの研究者3人も同行。設置に必要な資材についても用意してもらいました。

悪路を走って5時間。設置する村長宅の井戸は今は飲料用としては使っておらず、飲用水は雨水でまかなっていました。ただ、調理には井戸を使い、農村部のヒ素に対するイメージは細菌と同じで、加熱すれば無毒化されると思っているようです。DMRのスタッフは加熱してもヒ素濃度に変化がないことは知っていましたが、対策ができない現状では人々に説明はしていません。

この地域の健康被害については実態もつかんでいないようでした。近くのザローン病院へ訪問、使っている井戸水もヒ素濃度が高く早急な対策が必要という説明を受けました。日本から持ってきた装置は1台だったため、ヒ素吸着剤の援助を伝え、今後の協力体制について話し合いました。

今年3月、再びミャンマーを訪問、ザローンへ。試作装置は順調に動いているのを確認。病院にも新たに除去装置を設置してきました。

極力安価で現地に合ったヒ素対策となるように除去装置の容器、ろ過砂、などはミャンマーで調達してもらい、設置についてもDMRのスタッフで行えるように技術協力しながら、今後も汚染対策を継続していきたいと思います。

ヒ素除去装置をチェックする東谷さん(右)＝ザローン。村本聡・毎日新聞記者撮影

AED贈り 使い方指導

岡山市民病院救急看護部長
矢敷 朝代

氏家良人・岡山大学医学部教授（救急医学）から「ミャンマーへ救命講習に行きます。参加しませんか」と言われ、すかさず「ハイ」と手をあげました。今から思うとなぜ、即答したのだろう。英語、ミャンマー語なんて全くしゃべれないのに…。ミャンマーという国の医療はどの程度なのか、自分のスキルがどれくらい伝わるのか。一瞬、そう感じたのではないかと思います。

1月8日朝ヤンゴン空港へ着き、ホテルへと車へ乗り込むと「これは何だ！」と驚きの連続でした。ガソリンの痛烈な匂い、シートベルトはない、シートは破れている、ルームミラーはガムテープで張りつけられている。走っていると足元から道路が見える、車の天井は穴が空いている状態でした。

今回の訪問の目的は「NPO救命おかやま」として、ミャンマーにAED(自動体外式除細動器）を贈り、医師や看護学生に使い方を伝授することでした。AEDは政府保健大臣に寄贈し、医師や看護学生らに日本から持参した蘇生用の人形とAEDトレーナーを使用し実際に体験してもらいました。みんな非常に真剣なまなざしで熱心に取り組んでいました。ミャンマーの医療環境は日本よりかなり遅れており、器材も十分にないなかで、一生懸命に取り組もうとする姿にとても感心しました。

その一方で、私たち日本は沢山の医療機器に恵まれており、非常に幸せだなとつくづく感じました。

無事に講習を終えた頃より氏家先生をはじめみんな非常に激しい嘔吐、下痢、発熱の症状が出て、「やはり来たか」という感じでした。胃が3倍になったようなムカムカ状態。食事は中華が主で果物も非常の美味しかったのですが、同行の岡田茂理事長が現地の人から貰ってきたヤシ酒が原因のようで、しきりに謝っていました。

バコダの寝仏を拝見し、非常にスケールの大きさを感じ、また、ルビーや天然ガスなどが豊富だと知り、これからどんどん発展をする国だと実感しました。しかし、医療はまだまだ遅れており、もっと色々な国から援助すべきだと思います。

今回はとても良い経験をさせていただきました。少しでも医療現場の役に立てたかなとも思いました。また機会があれば参加し、その時は1台でもいい器材を持参したいですね。

看護大学生らを前に救急救命法を指導する矢敷さん（中央）＝ヤンゴンの国立看護大学

広報室から

どこの国に生まれても

「遊びをせんとや　生まれけむ　戯れせんとや　生まれけむ　遊ぶ子どもの声聞けば　我が身さへこそ　ゆるがるれ」

梁塵秘抄・巻第二の四句神歌に収められた今様で、NHK大河ドラマ平清盛の劇中でもたびたび耳にする歌です。子供が夢中になって遊んでいる姿を見て、わが心も浮き立つようだという意味です。子供は未来を切り開いていく象徴で、健やかに育って欲しいと願うのは、どの時代もどこの国でも同じでしょう。

日本の少子化も深刻な問題ですが、ミャンマーにおける新生児、乳児の死亡率の高いことは、私たちの会にとって由々しき問題です。2010年の世界保健機関（WHO）の発表によれば、ミャンマーの乳児死亡率は1000人中54人（日本は2人）、新生児死亡率は1000人中48人（日本は1人）で、これはWHO加盟193カ国のなかでワースト7位です。

子供たちの死亡率と共に高いのが妊婦の死亡率であり、女性特有の病気の罹患率です。医療の立ち遅れのほかに男尊女卑の習慣が根強く残っていることも影響しているのでしょう。

しかし、当NPOの支援で女性医師がたくさん研修に来ているのは幸いなことです。そして研修の機会を与えられた彼女たちの熱心さは筆舌に尽せません。

私は多くの研修生のお世話をしましたが、今でも忘れられないのは、跪いて感謝の言葉を述べたグ・ア・ミンのことです。まだ研修生を受け入れ始めて間もない頃だったので強烈な印象が残っていますが、それ故にミャンマーの医療の遅れや閉鎖的な社会情勢を痛感したものです。研修生たちは今でも、よく便りをくれて、みんなそれぞれに活躍しているのを耳にするたびに、大変嬉しく思います。そして異口同音に、また日本で研修したいので、自分の研究や医療技術を高めるために、日々努力していると言います。

彼らの努力が花を咲かせ、多くの人々が進んだ医療の恩恵にあずかれる日がくるのも、そう遠くないことかもしれません。子供は、国を選んで生まれることはできません。どこの国に生まれても、健康で明るい未来が約束される世の中になるよう心から願わずにはいられません。

（福山支部長　西山 央子）

協会だより

26万円集まる

22ヵ所の募金箱

協会への支援を呼びかける募金箱を病院や商店など22ヵ所にお願いしていますが、3月末で、募金総額が26万4277円にのぼりました。協会の活動費に使わせていただいています。募金を寄せて下さった大勢の皆さんに深く感謝するとともに、設置施設には引き続きご協力をお願いいたします。

福山支部若者の集い

3月28日、福山市の支部事務所であり、約30人が参加しました。